

はじめに

日本の人口現象——少子化、高齢化、人口減少——つまり、人間の生と死の問題が、私たちの命についての心とその表現としての行動とに深く関わっていることを明らかにしたいと、本書を企画しました。

人口現象では人間の数（量）の変化に注目が集まりがちです。しかし、この量の変化に潜んでいる、あるいは、量の変化をもたらしている私たちの「命についての考え方」、つまり、質の変化こそが検討されるべきでしよう。人間がどのようにして生まれ、生まれた命をどのように扱い、どのように命を終えるかについての考え方には、革命的ともいえる重大な変化が起こっていることに注目するべきです。本書は、この変化の事実とそこに起こっている問題を明らかにし、さらに、新しい方向を見出すことを企図しています。

人口の減少

人口学は人口の数、分布、構造、変動などの人口現象を扱う学問です。その人口学によれば、注目すべき第一の人口転換が産業革命を契機に起こりました。出生率と死亡率がともに低下したこと、つまり、そ

これまでの多産多死から少産少死へと変化したとされています。多産多死ではなく少産少死によつて人口が一定に保たれるようになつていきました。ところがその後、出生率が「置き換え水準」（親世代と子世代が置き換わつて人口が一定に保たれる水準のこと）で、日本では合計特殊出生率が二・〇七であることが必要）を大きく下まわり、人口の減少が地球上の広い地域で見られるようになつてきました。人口学者の間では、これを第二の人口転換とよぶべきではないかとされています。

日本の人口はすでにピークをすぎ、これから人口が減少していくと予測されています。事実、一九五〇年年の国勢調査は資料のある一九二〇年以来はじめて日本の人口がこの五年間に〇・七%（約九五万人）減少したことを明らかにしました。これは、出生数から死亡数を引く人口の自然減が大きくなつたせいだと説明されています。つまり、超少子化になつたことが人口減少の原因です。

人口の心理学の提案

少子化、高齢化、人口減少という人口現象を理解するために、本書では人口の心理学を提案しています。人口の心理学は人口現象、つまり、人間の命について、人々がどのように考え、感じ、どのように行動するかを扱います。人口の革命的変化の時代に生まれ、そのメンバーとしてこの時代をつくつてもいる人間を問題にする人口の心理学は、私たちが知る限り類を見ないものです。

心理学は人間がじかに接する具体的・直接的な環境（例えば、家庭、学校など）を扱うことを得意としてきました。しかし、人間がその中で生活していてその影響から逃れられないことはわかつてはいても、文化、時代精神、社会状況などの抽象的・間接的な環境が人間に与える影響や、人間がそれらをどう担つて

いるかを確かめることをほとんどしてきませんでした。心理学の研究方法である実験や調査によって知ることが難しいからです。

誕生から死までの生涯にわたる人口現象をよく理解しようとすると、既存の心理学から得るものは多くはありませんでした。本書の執筆者リストが示しているように、人口学、歴史学、民俗学、文学、経済学、社会学、教育学、社会福祉学、医学など、人間の生き方や命を扱う学問や実践による知識・経験を総動員することが必要でした。人口の心理学にはこの学際性が欠かせません。本書によつて、人口の心理学が扱うべき問題を提案したいと思います。

ジェンダーの視点

本書の構成を考えるとき、私たちが特に重視したのは、性別による差別を見逃さないジェンダーの視点をしつかりと入れることです。現在でも、日本の社会全体に男女の役割分業の思想が蔓延し、ことに、命に関わる育児、家事、介護などのケアは女性の仕事だ、ケアラーは女性だと見なす誤りをいまだに克服できていないからです。つまり、日本では少子化、高齢化、人口減少の問題を女性問題であるとする勘違いがまかり通っています。命についての社会通念や政府の対策の中に、ジェンダーによる歪みがどのようにあるか、それを見逃さないように章とコラムを考え、それぞれの執筆者にお願いしました。その結果、目次のようなラインナップになりました。

命についての三つの問題——本書の構成

本書では、命についての心と行動を、次のような三部に分けて検討することにしました。それぞれの専門家による一章と、問題を理解するために必要な一七のコラムを用意しました。そして、序章では本書の問題とその背景とを、終章では本書のまとめと今後の課題を述べています。

第一部 命の誕生——「授かる命」から「つくる命」へ

現在、命は「授かる」ものではなく、「つくる」ものになつたといつてよいでしょう。

第1章、第2章では生殖補助医療、不妊治療、遺伝子診断がどのようなものか、「命の選別」に関わる問題を述べています。第3章では胎児・嬰児の命への介入についての考え方の変遷を江戸時代からたどっています。第4章では血縁のある家族が重視される日本で、血のつながらない養親と養子の親子関係が実現できる可能性を扱いました。

第二部 親子関係——「少子の子ども」と「長命の親」

ここでは、選択して産まれた命が大切に扱われているか、長命になつた親と子は幸せに暮らしているかを検討しています。第5章では子どもを産む理由（子どもの価値）を明らかにし、第6章では、日本社会に特有だとされる育児不安とその背景を述べています。家族を中心のところとし、個人ではなく、家族を単位として制度や政策が設計されている日本の親子関係の特異性を第7章で論じています。健康保険

と介護保険の制度によって、介護の社会化が進みました。第8章ではその全容を述べています。高齢者の介護の諸問題は序章でも明らかにしています。

第三部 命の終わり方——「長命」は「長寿」か

命を人為的に操作し始めた社会では、命が枯れて朽ちていく、すなわち、老いること、死ぬことの意味を変化させています。まず、第9章で人間の死をどう考えるかについて述べています。長命になり、第一線から退いてからの死は、葬儀の社会的意味を薄れさせ、葬儀も墓も当人が望むようにするという個人化が進んでいることを第10章で明らかにしています。第11章では、卒寿を迎えた執筆者が、社会学者として、そして、高齢の当事者として、老いと死を論じています。

本書が、命の意味や価値を再考するきっかけになれば嬉しい限りです。

一〇一六年三月

柏木 恵子
高橋 恵子